

令和 2 年 6 月 8 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K08009

研究課題名(和文) 景観秩序を活かした農村の生態的・文化的なランドスケープを育む仕組みと実践の研究

研究課題名(英文) Study on the organizational structure and practice for ecological and cultural landscape powered by the hidden landscape order in rural area.

研究代表者

大澤 啓志 (OSAWA, Satoshi)

日本大学・生物資源科学部・教授

研究者番号：20369135

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：歴史的に蓄積された土地利用システムによる農村の美しさの構造把握により、住民活動団体等によるそのシステムの継承的創造の可能性を検討した。事例調査により、農村集落の審美的原理として“生きられる空間”の存在とその健康美を明らかにした。植生管理作業の継続には景観保全の成果や地域への誇りが“やりがい”に結びついていること、特に湿地には地域特有の生態システムが隠れた構造として作用していることを明らかにした。在来植物種の地域資源化では、地域づくり活動の有機的連鎖によってもたらされる景観の重要性を指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

どこにでもある、ある意味“普通の農村”において「隠れた構造(それは景観に反映され、景観秩序を生み出す)」を見出すことで、実はユニークであり、同時に今日的意義を有していることを再評価することが可能であることを示した。その把握には、単なる外観的な審美性ではなく、“農村の健康美”という住民の精神が反映した景観秩序という枠組みが効果的であった。地域生態システムの上で展開してきた地域景観と、そこにおける生物資源利用の正統性を引継ぎ、「遊びから生業の複合」の中で無理なく楽しみながら地域づくりを展開する視点が、今後の地域持続において重要であることを示した。

研究成果の概要(英文)：I investigated the structure of beauty of the rural landscape by the sustainable land-use system accumulated historically, and discussed a possibility of the succeeding creation of the system by resident activity groups. This is based on the idea that a landscape order is invented by existence of the ecological and cultural hidden structure in an ordinary agricultural district. Not just external beauty, but the framework of a landscape order as "the healthy beauty of the rural area" that reflected resident's spirit was effective for local revitalization activity with the continuation. It's important to build the social system that various actors are concerned to succeeding creation of the local landscape by taking authenticity of the local ecosystem and the tradition of bioresources utilization.

研究分野：景観生態学

キーワード：農村ランドスケープ 生物多様性 景観保全活動 多様の統一 野焼き 地域資源 カヤネズミ 棚田

1. 研究開始当初の背景

農村域における健全な地域社会の維持は、我が国の均衡ある発展及び国土保全上重要となる。特に中山間地域ではアンダーユースに伴う景観の荒廃や農村の生物多様性の劣化が今後とも進む恐れが強く、地域活力の持続や創出が課題となる。そこにおいて、農村の「美しさ」は住民の地域保全活動の意識醸成に加え、外部からの協力者確保やツーリズムの対象として要目となる。棚田や散居集落等で既に著名な景観地も存在するが、必ずしも著名な景観地ではない農村でも適応可能な「農村の「美しさ」を軸にした景観秩序を守り活かす地域持続活動」の理論構築およびその計画論化が喫緊の課題である。その実態や成立メカニズム、変遷や継続要因を丁寧に明らかにし、地域計画や地域振興策の中に組み込んでいくことは、人口減少時代における今後の地域の持続性を確保する上で意義あるものと考えられる。

2. 研究の目的

本研究では、「地域特性に即した景観あるいは土地利用の秩序に農村の美しさがある」という仮定を設け、見た目だけではない、歴史的に蓄積された隠れた土地利用システムに裏打ちされた農村の美しさの構造を明らかにすることで、住民活動団体等によるそのシステムの継承的創造の理論構築を行うことを目的とした。その際、その景観秩序を保ち・活かすための住民活動の存在に着目した。すなわち、活動主体があることで内部・外部に対しその地区の農村の「美しさ」が意識化しやすくなるとともに、実際に景観の維持・保全活動が実践されるためでもある。

3. 研究の方法

本研究では事例地での実地調査を基に、(1)集落景観の審美的原理、(2)景観保全活動における地域資源の認識過程とその活用、(3)景観保全活動に伴う生態保全機能について考察した。

(1)審美的原理については、栃木県那珂川町小砂地区での屋敷の構成要素に地域産業の歴史の跡が残り、また集落景観に一定の土地利用パターンを持つことに着目し、その美的内実を検討した。(2)地域資源の認識・活用については、埼玉県加須市「浮野の里」での過湿地の土地利用(ヨシ原)を“地域を特徴付ける景観”に転換した保全活動の持続要因、及び静岡県沼津市戸田地区での地域経済活動に組み込むのを視野に入れた在来種タチバナの栽培化の過程と課題を考察した。(3)生態保全機能については、埼玉県加須市「浮野の里」のカヤネズミ、及び千葉県鴨川市大山千枚田の早春季繁殖型両生類を取り上げ、景観保全活動の意義を考察した。

4. 研究成果

(1) 集落景観の審美的原理 ~特に“生きられる空間”を軸に~

小砂地区の集落 22 軒に対し、屋敷の構成要素の特徴把握、背後の山林から屋敷そして農地へと連なる土地利用配列の特徴把握を行った。山林(持山)、屋敷、畑、水田とそれぞれの要素が概ね一直線上に配されており、様々な生活資材を得る持山と食料を作る農耕地、井戸による水、そして住まいといった言わば“生きられる空間”が一揃いで存在しているのが特徴であった(図1・2)。これは地形や表層・地下水の流れに応じたきめ細やかなものであり、屋敷を中心とする周囲の立地条件を踏まえた生態的に無理のない、持続性のある土地利用形態と言える。一方で、屋敷裏手の持山は土砂災害や倒木等の被害を受けるリスクも高く、受益性と損益性の両義的な性格を持ち合わせていた。その両義性に対する葛藤の一つの解決策として、災害発生を鎮めると共に、家の繁栄を託し、自身の生活の場(母屋を中心に置く屋敷)と生産の場(農地)を一望する山中に氏神様の祠を多くの家で祀っていた。すなわち“生きられる空間”を居住者が意識する要として、それらを見守る形で持山の山中に氏神様が置かれていた。一般的な来訪者にはこの氏神様の存在は認識できないが、居住者は氏神様を要とする自身の“生きられる空間”を強く認識し、屋敷周りの生活空間や生産空間に対して目の行き届いた手入れを行っているのである。これは居住者が屋敷を代々受け継ぐとともに日常生活の場としてその空間の意味を経験・再了解しているためでもあった。そこには、小砂地区で続けられてきた美化活動の蓄積による、身の回りの空間を美しく保つことへの意識醸成も寄与していると考えられた。

この“生きられる空間”の配置が丘陵斜面と谷底部の境界に沿って並ぶことにより、集落景観にある種の美しさが得られていた。このような、一見個別적でありながらも谷の軸に沿って方向性を有する土地利用配置という空間構造が繰り返し生じていることは、景観論における「多様の統一」に当てはまる。本地区の集落景観の場合、必ずしも明示的な素材あるいは向きや色が揃っている訳ではない。しかし、乾燥小屋や灰小屋等の地域らしさを醸すアクセントを散見させつつ立地条件に即した基本形の土地利用配置に示されるよう安定感のある土地利用形態を形作っていること、それが氏神様を要とする“生きられる空間”として居住者に認識され手入れの行き届いた状態で保たれていること、の二点が揃っているのが特徴であった。この各屋敷の“生きられる空間”という類似傾向を持つ単位が斜面・谷底部の地形変曲点に繰り返し並ぶ構造にその一つの美的本質を見出せるとともに、その繰り返されて並ぶ“生きられる空間”には土地利用における生態的安定性あるいは合理性が認められ、景観の秩序を感じる事が出来る集落景観ともなっていた。さらに、背後に上述の“生きられる空間”という単位が地形変曲線上に繰り返すという多様の統一を構造的に担保しつつも、直接的な視覚的優美性とは異なる、手入れが行き届いていることを含めた生態的安定性から感じられる心理的な心地良さ(農村における人間社会の営み、また生態系の営み、さらに両者の関りの健康美の感覚)をそれらが醸していることが、



図1 各要素の配置例（点線は「生きられる空間」）

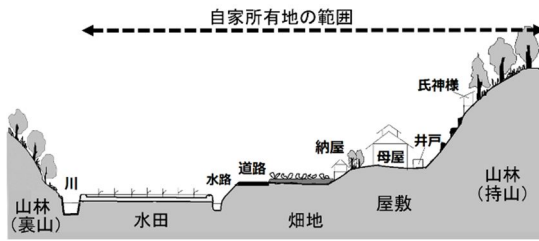


図2 基本形態の土地利用配列の断面模式図

本小砂地区の集落景観の審美的原理となっていた。農村の物的空間に過去（本地区では自然の両義性への葛藤の解決策として氏神様の配置）及び現在（本地区では生活・生産空間の日々の手入れ）も人々の精神性が反映されている集落景観は、表面視覚的な美的要素の有無を問わずにその“豊かさ”故に強く人の心を惹きつけ、十分にオリジナルな地域資源になり得るのである。

(2) 景観保全活動における地域資源の認識過程とその活用

活動による景観保全の成果と“やりがい”の関わり

加須市「浮野の里」では、住民による湿地保全活動の一環で毎年野焼きが行われている。野焼きは行政（特に消防部局）との調整、事前の刈り払い、周辺住民への周知・理解、スタッフの確保、本番の火入れといった事務手続きの煩雑さや多大な現場作業の労力や危険を伴うものであり、その継続には何らかのインセンティブすなわち「やりがい」が重要となる。アンケート調査により会員が活動に参加することで住民同士のコミュニケーションを通じ地域の連携を図っている、あるいはあやめ園やノウルシ群落等の地域を特徴づける景観が外部からの来訪者に注目されることで地域の価値を再認識して地域に対しての誇りを持つようになること、が「やりがい」を感じることに関係していることを明らかにした（表1）。農村の地域再生における「地域を誇りに思う価値観」や「外部からの視点」の重要性は既に指摘されているが、本事例のような経済的メリットの低い景観保全活動のインセンティブにおいてもそれらは極めて重要な要素となっていた。合わせて、農村の生物相の保全・回復は、「誇り」に代表される農村の暮らしの健全性との連動が求められるとも指摘される。実際、初夏の「あやめ祭り」と春先のノウルシの開花景観が観られる期間は当地区に外部の市民が多く訪れており、「素敵な場所ですね」との声を得られる大事な場となっていた。これら、景観保全活動によって良質な住環境（住民間の連携も含む）が持続できるとの認識が、野焼き等の活動の継続に強く関与していると考えられた。さらに、自身らの活動によって湿地の景観すなわち湿地植生が保全されているという認識が「やりがい」の多寡にも結びついており、活動の結果が具体的な空間として目に見える形（本事例では良好な湿地植生を有するヨシ原）で存在することも活動の持続に強く関与することが示唆された。

過去の空中写真等の分析より、少なくとも明治期より存続した当地区の3カ所の湿地は、戦後の萱材の需要が低下した段階において、湧水の存在等により土地改良を行っても水田化が困難な当地区の排水不良な土地条件の下、当時の食料増産の視点からは地域にとって負の要素であり、それは過湿地という自然的条件によるものであった。一方でそれは、埋没谷からの地下水湧出という地表下の地形や水文により生じた特性でもあり、天然記念物指定を契機に湿地を主な舞台とする景観保全活動が進められてきたという、地域景観の基盤条件ともなっていた。また、1980年代以降の水田休耕地の増加は産業廃棄物等の処分地の対象になり易いという社会的背景の下、放置ではなく活用が地域課題として持ち上がった。すなわち、湿地を地域資源と捉え活用することで来訪者によるチェック機能を求めたのである。そして湿地や田堀り、そして湿地に生育するノウルシや植栽したあやめ類に地域アイデンティティーとしての価値が見出されてきた。もちろん野焼きの主目的はノウルシだけでなく湿地植生の保全であるが、ノウルシの生育が野焼きといった地域で続けられてきた伝統的な湿地管理手法と結びついていたため、その群落の開花景観を自身らの活動の結果による地域景観資源と捉えていた。これまでのヨシ原の有する生活財・経済的財に対し、今日的な環境財としての保全の取り組みが住民に新たな視点を提供すると指摘される。そこにおいては、自然資源シンボルが重要な役割を果たすと考えられ、当地区の景観保全活動における自然資源シンボルは、湿地植生そしてノウルシといったものであった。

表1 「活動におけるやりがい」の回答と「住民の連携」「地域への誇り」「景観保全の認識」のクロス集計

活動におけるやりがい	住民間の連携						地域への誇り						景観保全の認識					
	とても強まった	強まった	どちらとも強まった	どちらとも強まった	回答	回答	とても強まった	強まった	どちらとも強まった	どちらとも強まった	回答	回答	よくできている	できている	どちらともできている	どちらともできている	回答	回答
ある	19(27.5%)	4	12	2	0	1	2	13	4	0	0	4	13	2	0	0		
あまあまある	41(59.4%)	4	27	10	0	0	3	14	20	1	3	4	30	7	0	0		
ない	6(8.7%)	0	2	3	1	0	0	1	4	1	0	0	1	4	1	0		
回答なし	3(4.3%)	0	0	1	0	2	0	0	2	0	1	0	0	1	0	2		

注：表中数字は回答数。

グッドマン=クラスカルのγ値（回答なしを除いて算出）：やりがい×住民間の連携 = 0.57, 同×地域への誇り = 0.60, 同×景観保全の認識 = 0.60

が、合わせて自ら植栽・管理している湿生園芸花卉類ハナショウブ等も当地区の湿地を特徴付けるシンボルと認識されていた。これら「あやめ祭り」やノウルシの開花時の外部来訪者の地域評価（地域への誇り）も意識しつつ、活動実績を肯定する中で住民がやりがいをもって景観保全作業を継続していた。そこにおいては、単なる景観保全のための作業に止まらず、コミュニティ醸成の場と認識していたことも、本事例のような住民による景観保全活動の要諦と言える。

在来柑橘種の地域資源化による地域活性化活動の課題

沼津市戸田地区での柑橘在来種タチバナの地域資源化の直接的な契機は、観光客数の低迷及びそれに続く地区人口の減少に伴う地区の魅力向上の模索であった。その際、当地が国内自生北限地という他地域では真似のできないユニークさが着目されたとともに、主要農産物であった柑橘栽培の技術を応用できることも理由の一つに挙げられた。そして、外部からの科学的な調査研究を下地にしつつも、それを地域資源として地域活性化に結び付ける地域内部からの動きであったことがその後の連綿とした活動の継続に結び付いてきた。沼津市との合併に伴う活動推進主体の曖昧化が一時生じたものの、現在は森林組合及びJAが中心になり、栽培タチバナの買取りやPR活動（「戸田たちばな」として、絶滅危惧種であること、当地が北限自生地であることをアピールしている）が展開されていた。実際には農家からの実の買取り制限を設けている等、加工した特産品等の売上額は必ずしも十分ではないものの、これまでの栽培化及び特産品化の地道な取り組みにより、一定の金額が地区内の栽培農家や加工・販売者に回る仕組みが形作られていた。これは、農山村の地域持続に求められる「小さな経済」の確立に当てはまると考えられ、その取り組み自体は高く評価できる。そこにおいて我が国の生物多様性の一つの表れである絶滅危惧野生柑橘の自生地であることを、関係者らがユニークな地域資源として意識している点が特筆された。ただし、現在の「栽培化 実の集荷 加工・販売」の仕組みも、根底には農家の収入の補填の考えがあってスタートしたものであり、必ずしもタチバナの地域資源化における景観との結びつきが意識されていた訳ではなかった。このためタチバナを原料とした特産品の開発・販売に、これまでの活動が傾注していた。結果としては地区内に多数の栽培株が現在分布しているものの（図3）、かつての炭焼き業と自生地の関係や果樹栽培技術の応用といった地域の歴史性を伴った地域資源化の活動によってもたらされた景観、言い換えれば地区内で思いを持った人々による地域づくり活動の有機連鎖性によって生じる景観について、栽培者や来訪者等に対する明示的なPRは行われていなかった。

本事例は、地域の生物多様性の一つの表れ（絶滅危惧種の分布北限自生地）を活かした「小さな経済」を契機としながら良質の農村景観が誘導される、そんな可能性を秘めた活動である。すなわち北限自生地のタチバナをシンボルに、栽培タチバナを活用した多様な地域づくりの有機連鎖性が感じられる農村景観を地域の誇りにしていく、といったものである。そのためには、これまでのタチバナの特産品の開発・販売を中心とする活動に加えて、そのタチバナ栽培を軸にした地区内の多様な関り・連鎖を可視化する活動も今後重要になると考えられた。さらに、野生個体群 山採りによる農家庭先への移植 その穂木を用いた苗木生産 各農家への配布、と現在の栽培タチバナは地域性系統を保っていることも明らかにされ、この事実も当地区における重要な“コト”の一つである。自生地の保全から地域の良質な景観形成までを連続したものと捉え、観光客との主な接点となる宿泊施設や観光施設・店舗等を始め、様々な場面において地域全体で取り組んでいることやその意義を丁寧にPRすることが、長い目で見て廃れのない地域資源化に結び付くと言える。そこでは単に「お金になるから」だけではなく、特色ある景観の形成を地域資源として捉え、実の出荷による経済性に直接的には関わらない「遊び」の要素も加えた栽培タチバナの利活用の工夫をすることで、関わる住民の裾野を広げる視点が求められる。

(3) 景観保全活動に伴う生態保全機能

野焼きによる湿地景観保全活動とカヤネズミ生息の関係

加須市「浮野の里」の湿地で球巣計数調査を行った結果、2016年に30個、2017年に74個が確認された。当地区は利根川の氾濫原に位置し、丘陵や山地から離れた平野部の水田域であるにも関わらず、カヤネズミは比較的大きな個体群を維持していることを明らかにした。「浮野の里」には、その地象水文的要因（埋没谷からの湧出水）及び農村開拓の歴史的要因（田掘りを伴う水田開墾とそれでも開墾されなかった過湿地、そして近年の休耕田の存在）により湿地が比較的まとまって存在し、それら半自然草地である湿地がカヤネズミの個体群の維持に寄与しているものと推察された。我が国においては平野部の低平地がほとんど水田に置き換わってしまっており、本対象地は低平地の本来の湿地における本種の生息状況や営巣習性を知ることが出来る貴重な場所であると言える。まず、ヨシが優占する湿地ではヨシの葉を利用した営巣は全く確認されなかった一方、下層にカサスゲ等のスゲ属が生育している場合はスゲ属を嗜好して営巣していた（図4）。このように「浮野の里」では、地域住民によって冬季に野焼きが継続されてきたことにより遷移が抑制され、カサスゲを始めとした湿地に生育する草本類が維持・保全されてきたと推察された。ただし、ほぼヨシのみで構成されカヤネズミの営巣が期待できないヨシ群落が「浮野の里」では最大の群落面積を示し、それらは土壤の乾湿区分の「湿」～「乾」とやや乾

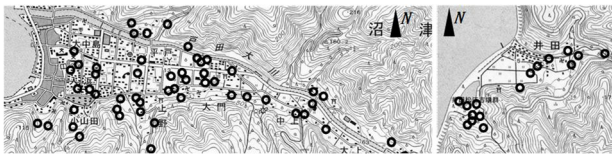


図3 戸田地区のタチバナ植栽株の分布状況

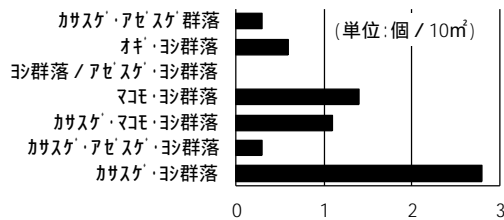


図4 群落タイプ別のカヤネズミ営巣密度

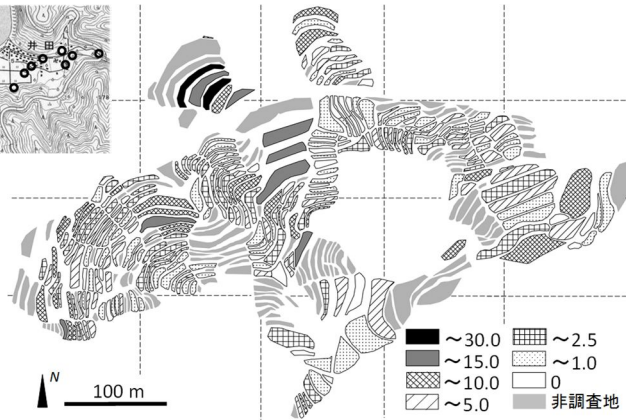


図5 トクヨウサンショウウオの10年間の区画別平均卵嚢対数

性側に寄った立地に成立していた。本対象地におけるカヤネズミの保全の視点からは、より湿性側に寄った立地条件への改良により、湿地環境における多様な群落に移行させることが必要であるととも、半自然草地の植生管理においてカサゲあるいはアゼスゲ等の中茎の湿地生のスゲ属を保全目標種・群落とすることも重要な視点と言える。

棚田保全活動と両生類の大規模な個体群維持の関わり

房総半島南部の大山千枚田において、早春季の両生類の産卵状況を棚田区画毎(275枚)に2005~2014年の10年間モニタリングした。トクヨウサンショウウオが平均675卵嚢対、ニホンアカガエルが平均650卵塊と大規模な個体群を形成していた。必ずしも高い確認頻度ではない区画も多かったものの、両種は概ね棚田全域を産卵に利用していた。これは早春季に全ての水田区画に水域が生じている訳ではない本棚田において、水域が形成され易い区画を中心に様々な条件の区画が多数存在することで多様な水域形成状況が生じていたためと考えられた。また、産卵が集中する水田区画が2種間で若干異なっており(図5)、棚田内においても種毎に繁殖上重要となる、すなわち種の保全を図る上で優先すべき区画があることが示された。一方、近傍地の耕作放棄された棚田では遷移や乾燥化が進み本棚田のような多数の繁殖は認められず、大山千枚田での棚田保全活動の果たしてきた役割は大きい。これは2000年から始まった保存会が主催する棚田オーナー制度で、外部支援者(主に都市住民)により小区画の棚田が維持されてきたためである(ただし、春先の畦切り・くる塗りや日々の水回りの維持管理作業等、地元農家の下支えに拠るところも大きい)。保存会へのヒアリングでは、高齢化等により本来の耕作者が耕作継続困難になった棚田を、順次引き受ける形で棚田オーナー制度の区画範囲を広げてきたとする。各地の中山間地域で耕作放棄の傾向が強まる中、本対象地では棚田オーナー制度により棚田景観が保全され、早春季に繁殖する両生類の高い産卵密度が維持されていることを明らかにした。

<まとめ>

どこにでもある、ある意味では“普通の農村”において「隠れた構造(それは景観に反映され、景観秩序を生み出す)」を見出すことで、実はユニークであり、同時に今日的意義を有していることを再評価することが可能であることを示し得た。その把握には、単なる外観的な審美性ではなく、“農村の健康美”という住民の精神が反映した景観秩序という枠組みが効果的であった。例えば、加須市「浮野の里」の住民による景観保全活動には図6に示すような循環持続的フローが成立し、その結果として湿地植生及び希少動物カヤネズミの生息環境が保全されていた。棚田保全活動と両生類の大規模個体群形成の関わりにも示されるよう、景観保全活動が二次的自然としての地域生態系保全に寄与すること(これは農村の健康美の一翼を担う)について、活動参加者が認識するための仕掛けや手法開発が課題である。また、地域の良質な景観形成までを標榜し、「小さな経済」を求心力にしながらも地域の多様なアクターがその「地域づくり」に関わる

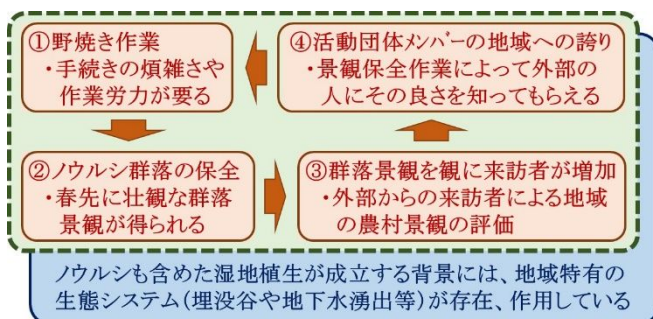


図6 景観保全活動の効果とそれを支える生態システム

構造を築くことも重要と考えられた。地域生態システムの上で展開してきた地域景観と、そこにおける生物資源利用の正統性を引継ぎ、「外からの刺激」と「内からの意思」を加味しつつ「遊びから生業の複合」の中で無理なく楽しみながら地域づくりを展開する視点である。そのような視野を持ったキーパーソン、すなわち多様な地域づくりの有機連鎖性を仕掛けて展開する人材の発掘・育成も不可欠と言える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 大澤啓志・間野明奈	4. 巻 38
2. 論文標題 埼玉県「浮野の里」における湿地の変遷と地域景観資源としての認識過程に関する研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 農村計画学会誌	6. 最初と最後の頁 221-229
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 大澤啓志・谷藤圭悟	4. 巻 82（5）
2. 論文標題 栃木県那珂川町小砂地区の農村集落景観の特徴と審美的原理	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ランドスケープ研究	6. 最初と最後の頁 605-610
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.5632/jila.82.605	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 黒田綱貴・曽根賢・大澤啓志	4. 巻 82（5）
2. 論文標題 平野部水田域の半自然草地におけるカヤネズミの営巣習性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ランドスケープ研究	6. 最初と最後の頁 687-690
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.5632/jila.82.687	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 中村裕之・七海絵里香・大澤啓志	4. 巻 10
2. 論文標題 農村における高校生農村-都市交流での体験共有による人を介した地域ランドスケープ理解の実践	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ランドスケープ研究増刊 技術報告集	6. 最初と最後の頁 84-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大澤啓志	4. 巻 80
2. 論文標題 胆沢扇状地の散居村ランドスケープ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 BIOCITY	6. 最初と最後の頁 72-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大澤啓志	4. 巻 37
2. 論文標題 西伊豆戸田地区における在来野生柑橘タチバナの地域資源化に向けた取り組みと生育実態	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 農村計画学会誌	6. 最初と最後の頁 161-167
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.2750/arp.37.161	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大澤啓志	4. 巻 19
2. 論文標題 千葉県鴨川市大山千枚田における早春季に繁殖する両生類の産卵動態	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 棚田学会誌	6. 最初と最後の頁 58-71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件(うち招待講演 0件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 大澤啓志・間野明奈
2. 発表標題 埼玉県加須市「浮野の里」を特徴付ける並木の樹種構成
3. 学会等名 日本造園学会関東支部大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大澤啓志・間野明奈
2. 発表標題 埼玉県「浮野の里」における湿地の変遷と地域景観資源としての認識過程に関する研究
3. 学会等名 農村計画学会秋期大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大澤啓志・有澤翔太
2. 発表標題 富山県三乗棚田の圃場整備後に長期経過した長大法面の畦畔植生
3. 学会等名 農村計画学会春期大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 間野明奈・大澤啓志
2. 発表標題 平野部の農村景観の保全活動における住民意識 - 埼玉県加須市「浮野の里」を事例に -
3. 学会等名 日本造園学会関東支部大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 A. Mano, S. Osawa, K. Fujisaki
2. 発表標題 The effects of natural and social factors on conserving the “Ukiya no Sato” wetland near metropolitan district of Japan.
3. 学会等名 2018 ICLEE 9th Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 間野明奈・大澤啓志
2. 発表標題 歴史的な負の土地利用景観を地域資源とした住民活動の持続要因 - 埼玉県「浮野の里」におけるヨシ原保全を事例に -
3. 学会等名 農村計画学会春期大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大澤啓志・間野明菜
2. 発表標題 希少植物ノウルシの群落景観を地域資源とする住民による管理・保全サイクル
3. 学会等名 日本生態学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大澤啓志
2. 発表標題 西伊豆戸田地区における在来野生柑橘タチバナの地域資源化に向けた取り組みと生育実態
3. 学会等名 農村計画学会秋期大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大澤啓志
2. 発表標題 南房総大山千枚田における早春期繁殖型両生類の長期産卵モニタリング
3. 学会等名 日本爬虫両棲類学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 間野明菜・大澤啓志
2. 発表標題 埼玉県加須市「浮野の里」における湿地の変遷とノウルシの分布の関係
3. 学会等名 日本造園学会関東支部大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大澤啓志・中村裕之・七海絵里香
2. 発表標題 栃木県那珂川町での高校教育における農村-都市交流プログラムの実践
3. 学会等名 日本造園学会関東支部大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考